

## 【実践研究】

## 小学校高学年児童自己成長意欲尺度の作成とその活用

四辻 伸吾\*      水野 治久\*\*

本研究は、小学生児童が自分自身を成長させたいという意欲について明らかにする「小学校高学年児童自己成長意欲尺度」の作成を試みるとともに、その尺度を活用して実践を行ったものである。研究1として小学校5・6年生児童198名の児童を対象に「小学校高学年児童自己成長意欲」に関する質問紙調査を行い、調査結果を因子分析したところ、＜社会性スキル成長意欲＞因子、＜学習性スキル成長意欲＞因子の2因子14項目が得られ、これを「小学校高学年児童自己成長意欲尺度」とした。研究2として、「自己成長意欲」を高めるため、小学校5年生児童120名に対して、教育実習生との関わりから自分の生活力を高めようとする取り組みである「教育実習生との関わりプロジェクト」と、学期末テストに向けて毎日の学習について見通しを持つという取り組みである「学習への見通しプロジェクト」を行った。その結果、＜社会性スキル成長意欲＞は「教育実習生との関わりプロジェクト」により、有意に高まる可能性が示唆された。また、＜学習性スキル成長意欲＞は「教育実習生との関わりプロジェクト」と「学習への見通しプロジェクト」の連続的な取り組みにより、有意に高まる可能性が示唆された。

キーワード：自己成長意欲、小学校高学年、社会性スキル成長意欲、学習性スキル成長意欲

## 【問題と目的】

本研究は、小学校高学年児童が自分自身を成長させたいという意欲について明らかにする「小学校高学年児童自己成長意欲尺度」の作成を試み、それを活用することで「小学校高学年児童自己成長意欲」を高める実践を行ったものである。

小学校高学年児童は、「好奇心、意欲、チャレンジ精神、集中力、自主性など、積極的、能動的態度が発達する」「自己意識が発達する」「社会的能力が発達する」「抽象的思考能力が発達する」など様々な発達が見られる時期であるとされる(昔野, 2012)。また、発達段階を踏まえれば、「『もっと知りたい・学びたい』という知的欲求が高まることが予想される」時期だとされている(速水, 2012)。

しかし、実際には、そのような知的欲求の表れより、

意欲低下などが問題視されている。清水・橘川(2009)は、小学校高学年の学習意欲に影響を及ぼす要因を明らかにするため、5, 6年生168名を対象に質問紙調査を行っている。その結果、特に「女子において5年生から6年生にかけて学習意欲の低下が著しい」ことを示唆している。また、速水(2012)は「小学校高学年になると、学習内容が難しくなったり、最近の少子化の影響か子どもたちの学習意欲が低下したとか学力が低下したといった声の方が多くに思われる」としている。中央教育審議会(2008)においても、日本の児童生徒の学力低下の背景として学習意欲における課題を挙げており、「学力の重要な要素である学習意欲やねばり強く課題に取り組む態度自体に個人差が広がっているなどの課題があること」を指摘している。

小学生の意欲に関する研究は、先行研究に散見される。鹿毛(2013)は、意欲を『やりたい』という強い希求の行為の原動力として、意図的、計画的に目的の実現までやりぬこうとする心理現象』としている。これをふまえ、同じく鹿毛(2013)は、学習意欲を『学

\* 大阪教育大学附属平野小学校

\*\* 大阪教育大学

ぼうとする心理現象』の総称」ととらえており、「できるようになつてうれしい」といった知識や技能の学習プロセスに内在する心理的な体験自体と関わっているとしている。そして、「学習概念を広義に理解するならば、社会や他者と関わりながら学びと成長へと向かっていく当人の意欲の総称が学習意欲」であるとしている。

小学校高学年が、本来的には「もっと知りたい・学びたい」と知的欲求を高める時期であり、様々な発達や成長を実感できる時期であるならば、自分自身の成長についての意欲を高めることが重要であると考えられる。小学校高学年において、自分自身を成長させたいという意欲を高めることで、「もっと知りたい・学びたい」という知的欲求をさらに高めることにつながるのではないだろうか。これは、近年の教育課題である児童の意欲低下へのアプローチの一視点になりえると考えた。

そこで、本研究においては小学生が自分自身を成長させようとする意欲を捉える、「自己成長意欲」について着目したい。「自己成長」における先行研究としては、速水・西田・坂柳(1994)の「自己成長力」の研究がある。速水・西田・坂柳(1994)は「自ら自分自身を伸ばしていこうとする力」を「自己成長力」と定義し、自分で自分を教育していく姿勢を身に付けることの大切さを指摘している。この研究では小学校5年生から大学4年生の男女を対象に、「能力自己成長力」「生活自己成長力」「体力自己成長力」の3つの自己成長力の領域を設定し、それぞれの領域について「関心」「意欲」「遂行力」の3階層で検討している。

神藤(1998)は、中学生の学業ストレスと対処方略が自己成長感に与える影響について検証している。この研究では、ストレスを乗り越える際に、自ら成長しているという感覚、すなわち自己成長感が、後の動機づけにとって重要であると考え、学業ストレスに対する問題解決的対処が自己成長感を媒介して、学習意欲を高めることを明らかにしている。また、信野(2008)は、自らの努力によって苦境や困難な出来事を乗り越えられたときに敏感に感じられるものを、自己成長感とし、自己成長感尺度の作成を試みている。

以上、「自己成長」についての先行研究は散見されるが、そのいずれも小学校高学年段階に特化した研究は見られない。そこで本研究では、小学校高学年段階

における意欲の低下のアプローチとなるべく、「自分自身を成長させたいという意欲」を「自己成長意欲」として検討していきたい。

この自己成長意欲に似た概念として、「自己実現への欲求」がある。Maslow(1970)は、自己実現の欲求とは「自己を成就しようとすることへの願望、すなわちその人が潜在的にもっている可能性を実現しようとする傾向性」であるとしている。この自己実現に関して、桜井(1997)は、「小学校高学年以上の子どもでは、自分の生き方と関連するような目標をもって学習活動に励むことのほうが多い」としている。小学校高学年の児童が、具体的な目標を設定して自己実現に向けて様々な行動を起こしていく傾向が本来的にあるならば、近年の児童の意欲の低下について、これらの視点をふまえたアプローチが有効となってくるのではないだろうか。

また、自分自身の成長というものを、自分自身の行動の結果としてもたらされるものと考えたとき、自己成長意欲は、自己効力とも近い概念と考えられる。自己効力とは、「特定のパフォーマンスを達成するために求められる一連の行動を計画し、遂行できるかという点に関する自分の能力についての判断」(Bandura, 1986)である。鹿毛(2013)は、この自己効力を「〇〇という(具体的な)行動ができるという見通し(自信)」としている。この自己効力をふまえると、自己成長意欲は、「〇〇という行動ができるという見通し」である自己効力を基盤にしたものであると考えられる。柴山・小嶋(2006)は、「自己効力感が高い子どもは、『やればきっとできるだろう』という気持ちから、様々なことに興味を持ち、人から言われなくても自ら積極的に学習に取り組むことが予想される」としている。これらからも、小学生児童における意欲低下へのアプローチの必要性があることが推察される。

本研究においては、先行研究に見られる「自己成長力」や「自己実現への欲求」、「自己効力」などをふまえて、小学校5・6年生児童についての「小学校高学年児童自己成長意欲」という概念について検討していくことにする。この「小学校高学年児童自己成長意欲」は、「小学校高学年児童が自分自身を成長させたいとする意欲」であると定義する。

先述のように心理学における先行研究では、「自己

成長力」(速水・西田・坂柳, 1994) という概念があるが、これは「自ら自分自身を伸ばしていこうとする力」という定義に見られるように、「関心・意欲」とともに「遂行力」という行動を伴った概念であると考えられる。本研究における「小学校高学年児童自己成長意欲」は、小学校高学年児童が、自己成長へと向かおうとする「意欲」に着目することにより、小学校高学年段階における意欲低下へのアプローチへとつなげていきたいと考えている。

更に、「小学校高学年児童自己成長意欲」は「小学校高学年児童が日々の学校生活の中で自分の具体的な課題を踏まえて、自分自身について一步一步成長させたいと考える意欲」であると捉え、自己を大きく成就しようとするものである「自己実現への欲求 (Maslow, 1970)」や具体的な行動を達成することができるという見通しであると考えられる「自己効力感 (Bandura, 1986)」とは区別して捉えたい。

最後に、「小学校高学年児童自己成長意欲」は自己成長感とも捉えることができると言えなくもない。しかし、自己成長感とは、自らの努力によって苦境や困難な出来事乗り越えられたときに敏感に感じられるもの(信野, 2008)とされているように、その時点で感じることができるものであり、「小学校高学年児童自己成長意欲」は小学校高学年段階で、未来に向けて自分自身を成長させようとする意欲であると捉え、本研究では区別して考える。

測定面に注目すると、児童生徒の学校生活への意欲を測るものとして、学校生活意欲尺度(河村, 2006)がある。学校生活意欲尺度は、一人一人の児童生徒の「友達関係」「学習意欲」「学級の雰囲気」について把握するものであり、「楽しい学校生活を送るためのアンケート Q-U」(河村, 2006)として広く活用されているものである。この学校生活意欲尺度は、児童生徒のその時点での意欲を測るものであり、自分の将来への見通しを伴った意欲であると捉える「小学校高学年自己成長意欲」とは区別して捉えたい。

これより、本研究においては「小学校高学年自己成長意欲尺度」を作成するとともに、この尺度を活用し、小学校高学年児童に対して、実際に「小学校高学年児童自己成長意欲」が高まるための取り組みを行うことでどのような効果があったのかを検証することにする。

先行研究や近接概念においても、小学校高学年という発達段階だけに特化したものではなく、小学生の学校生活の中で高学年児童が自分自身についてどのようなことを成長させたいかを把握することで、小学生高学年児童により適切な学習展開や生活指導などのアプローチをすることができる考える。加えて、本研究を通して個々の児童への心理教育的援助サービスの実践や、学級経営などに生かす第一歩としたいと考える。

## 研究 1

### 【目的】

小学生が自分自身についてどのようなことを成長させたいと思っているかについて明らかにする「小学校高学年児童自己成長意欲尺度」を作成する。

### 【方法】

**調査時期** 2013年6～7月。

**調査対象** 近畿圏の小学校5～6年生198名。

#### 調査内容

##### 1) 自己成長意欲について

「小学校高学年児童自己成長意欲尺度」を作成するため、小学校5年生児童40名を対象に「あなたは自分自身についてどんなことを成長させたいと思っていますか」という質問について自由記述で答えさせた。その結果から「自己成長意欲」についての30項目を作成した。各項目の文末表記については、「〇〇について成長させたい」という表記ならば、ほとんどの児童が多くの内容について「成長させたい」と漠然と捉える可能性があり、尺度として天井効果が予想される。これより文末表記を「他のことよりも特にそれを意識したい」とし、文頭に表記されている「成長についての内容」を他のことよりも重視するということがより強く児童の印象に残るようにした。文末の「それ」は文頭の「成長についての内容」を指すこととする。これら30項目を質問紙として小学校5～6年生198名に実施した。教示文は、「あなたは、自分自身を成長させるために、どのようなことを特に意識してがんばろうと思っていますか。あてはまる数字に○をつけてください」であり、5

件法（「5：とてもそう思う」「4：そう思う」「3：どちらでもない」「2：あまりそう思わない」「1：そう思わない」）で回答が求められた。

## 2) 「楽しい学校生活をおくるためのアンケート

### (Q-U) (河村, 2007) について

本研究において作成する「小学校高学年児童自己成長意欲尺度」の妥当性を検証するため、小学校 5~6年生を対象に、「楽しい学校生活をおくるためのアンケート（以下、Q-U とする）（河村, 2006）を実施した。Q-U は、学校生活意欲尺度と学級満足度尺度の2つの尺度から構成されている。学校生活意欲尺度には、下位尺度として、＜友達関係＞＜学習意欲＞＜学級の雰囲気＞の3領域があり、これらは、学校生活における児童の意欲をはかるものとして「小学校高学年児童自己成長意欲尺度」と近接概念のものであると考えられる。そこで、「小学校高学年児童自己成長意欲尺度」と学校生活意欲尺度の相関関係を検証することにより、妥当性の検証を行うことにする。また、学級満足度尺度には下位尺度として＜承認項目＞＜被侵害項目＞の2領域がある。この学級満足度尺度は「小学校高学年児童自己成長意欲」の直接的な近接概念とは考えられない。しかし、Q-U が「学校生活意欲尺度」と「学級満足度尺度」の2つの尺度で活用されていることを踏まえ、近接概念である「学校生活意欲尺度」とともに、この学級満足度尺度を弁別的妥当性の検証として活用できると考えられる。加えて、Q-U は標準化された信頼性の高い尺度でもあることから、「小学校高学年児童自己成長意欲尺度」の妥当性検証に活用できると考えた。

## 【結果と考察】

### 1) 自己成長意欲に関する 30 項目の因子分析 (Table 1 参照)

自己成長意欲に関する 30 項目の因子構造を明らかにするため、重み付けのない最小二乗法による因子分析（プロマックス回帰）を行なった。因子数については固有値が 1.0 以上の 5 因子から 2 因子までの分析を試みたが、固有値の変化 (14.47, 2.71, 1.42, 1.21, 1.01) から、2 因子解を妥当と判断した。回帰前の 2 因子までの因子寄与率は 57.253% であった。天井効果の見ら

れた 11 項目（項目 10・14・15・19・20・21・22・24・27・29・30）を除外し、残り 19 項目について再度同様の因子分析を行ったところ、因子負荷量 0.50 以上の項目が 14 項目、因子負荷量 0.50 以下の項目が 5 項目見られた。因子負荷量 0.50 以下の 5 項目（項目 2・7・8・23・26）を除外し、同様の因子分析を行ったところ、すべての項目がいずれかの因子に .50 以上の高い負荷量を示すという単純構造がみられた。これより 2 因子 14 項目を最終尺度項目とし、「小学校高学年児童自己成長意欲尺度」とする。

第 1 因子において、因子負荷量の高い項目は、「どんな人とも仲良くできるようになりたいので、他のことよりも、特にそれを意識してがんばりたい」「人に対するせつし方がうまくなりたいので、他のことよりも特にそれを意識してがんばりたい」「はずかしがらずにみんなの輪に入れるようになりたいので、他のことよりも特にそれを意識してがんばりたい」などの 8 項目であった。これらは児童が、人との関わりや集団の中でどのように立ちふるまっていくかなど主に社会性スキルの成長に関する意欲であると解釈し、＜社会性スキル成長意欲＞因子と命名した。

第 2 因子において、因子負荷量の高い項目は、「勉強ができるようになりたいので、他のことよりも特にそれを意識してがんばりたい」「学校や塾のテストでいい点数をとりたいので、他のことよりも特にそれを意識してがんばりたい」「色々な問題がとけるようになりたいので、他のことよりも特にそれを意識してがんばりたい」などの 6 項目であった。これらは、児童の学習性スキルの成長に関する意欲であると解釈し、＜学習性スキル成長意欲＞因子と命名した。

各因子の下位尺度得点についてクロンバックの  $\alpha$  係数を算出したところ、＜社会性スキル成長意欲＞因子の  $\alpha$  係数は .898、＜学習性スキル成長意欲＞因子の  $\alpha$  係数は .909 であり、満足できる水準であった。これより小学校高学年児童自己成長意欲を測定する下位尺度は内的整合性の点で一貫した内容を備えており、信頼性の高い尺度であると考えられる。

### 2) 妥当性の検証

「小学校高学年児童自己成長意欲尺度」の妥当性を検討するため、＜社会性スキル成長意欲＞因子、＜学習性スキル成長意欲＞因子と Q-U の 5 領域とのピアソ

Table 1 小学生自己成長意欲尺度の因子分析結果

項 目	平均(SD)	因子パターン行列		
		F1	F2	共通性
<b>社会性スキル成長意欲 (<math>\alpha=.898</math>)</b>				
16. どんな人とでも仲良くできるようになりたいので、 他のことよりも、特にそれを意識してがんばりたい。	3.79(1.22)	.862	-.176	.585
13. 人に対する接し方がうまくなりたいので、 他のことよりも特にそれを意識してがんばりたい。	3.80(1.14)	.737	.039	.579
12. はずかしながらみんなの輪に入れるようになりたいので、 他のことよりも特にそれを意識してがんばりたい。	3.61(1.25)	.735	.016	.555
18. 周りを笑わせることができるようになりたいので、 他のことよりも特にそれを意識してがんばりたい。	3.42(1.30)	.730	-.130	.433
17. みんなともっと話ができるようになりたいので、 他のことよりも特にそれを意識してがんばりたい。	3.79(1.19)	.717	.047	.559
28. 落ち着いて行動できるようになりたいので、 他のことよりも、特にそれを意識してがんばりたい。	3.85(1.12)	.638	.152	.549
11. 自信を持って自分の意見を言えるようになりたいので、 他のことよりも特にそれを意識してがんばりたい。	3.61(1.25)	.617	.194	.567
25. グループをまとめることができるようになりたいので、 他のことよりも特にそれを意識してがんばりたい。	3.70(1.23)	.607	.114	.466
<b>学習性スキル成長意欲 (<math>\alpha=.909</math>)</b>				
1. 勉強ができるようになりたいので、 他のことよりも特にそれを意識してがんばりたい。	3.78(1.18)	-.121	.860	.625
3. 学校や塾のテストでいい点数をとりたいので、 他のことよりも特にそれを意識してがんばりたい。	3.82(1.16)	-.126	.856	.615
6. 色々な問題がとけるようになりたいので、 他のことよりも特にそれを意識してがんばりたい。	3.87(1.09)	.042	.813	.705
4. 計算が速くできるようになりたいので、 他のことよりも特にそれを意識してがんばりたい。	3.61(1.14)	.074	.774	.675
5. 漢字をたくさん覚えたいので、 他のことよりも特にそれを意識してがんばりたい。	3.66(1.16)	.143	.712	.654
9. 文章問題を解けるようになりたいので、 他のことよりも特にそれを意識してがんばりたい。	3.69(1.10)	.049	.693	.525
	因子間相関	F1	F2	
	F2	.619	—	
<b>除外された項目 (16項目)</b>				
2. スポーツがうまくなるようになりたいので、他のことよりも特にそれを意識してがんばりたい				
7. 英語が上手に話せるようになりたいので、他のことよりも特にそれを意識してがんばりたい				
8. 字がきれいにかけるようになりたいので、他のことよりも特にそれを意識してがんばりたい				
10. かしくなりたいので、他のことよりも特にそれを意識してがんばりたい				
14. 友だちをたくさん作りたいので、他のことよりも、特にそれを意識してがんばりたい				
15. 友だちとのきずなを深めたいので、他のことよりも、特にそれを意識してがんばりたい				
19. 困っている人がいたらすぐに助けることができるようになりたいので、他のことよりも特にそれを意識してがんばりたい				
20. 人の役に立つことができるようになりたいので、他のことよりも特にそれを意識してがんばりたい				
21. すばやく行動できるようになりたいので、他のことよりも特にそれを意識してがんばりたい				
22. どんなときも積極的に行動できるようになりたいので、他のことよりも特にそれを意識してがんばりたい				
23. 新聞やニュースからもっと知識を増やしたいので、他のことよりも特にそれを意識してがんばりたい				
24. いつも笑顔でいれるようになりたいので、他のことよりも特にそれを意識してがんばりたい				
26. 世の中のことをもっと知りたいので、他のことよりも、特にそれを意識してがんばりたい				
27. 先のことを考えて行動できるようになりたいので、他のことよりも、特にそれを意識してがんばりたい				
29. 計画を立てて行動できるようになりたいので、他のことよりも、特にそれを意識してがんばりたい				
30. 人に対してやさしくできるようになりたいので、他のことよりも、特にそれを意識してがんばりたい				

Table 2 小学校高学年児童自己成長意欲尺度とQ-Uの尺度間の関連

小学校高学年児童 自己成長意欲尺度		学級満足度尺度					Q-U 学校生活意欲尺度	
		①生活力 成長意欲	②学力成長 意欲	③承認項目	④被侵害項目	⑤友達関係	⑥学習意欲	⑦学級の雰囲気
小学校高学年児童 自己成長意欲尺度	①生活力成長意欲	-	.588**	.484**	-.090	.431**	.541**	.315**
	②学力成長意欲		-	.358**	-.066	.246**	.406**	.242**
学級満足度 尺度	③承認項目			-	-.407**	.742**	.553**	.605**
	④被侵害項目				-	-.454**	-.219**	-.455**
Q-U 学校生活 意欲尺度	⑤友達関係					-	.513**	.634**
	⑥学習意欲						-	.285**
	⑦学級の雰囲気							-

\*\* $p < .01$

ンの相関関係を算出した (Table 2)。

その結果、＜社会性スキル成長意欲＞因子は、学級満足度尺度、＜承認項目＞と中程度の正の相関 ( $r = .484, p < .01$ )、学校生活意欲尺度、＜友達関係＞と中程度の正の相関 ( $r = .431, p < .01$ )、＜学習意欲＞と中程度の正の相関 ( $r = .541, p < .01$ )、＜学級の雰囲気＞と弱い正の相関 ( $r = .315, p < .01$ ) が認められた。また、＜学習性スキル成長意欲＞因子は、学級満足度尺度、＜承認項目＞と弱い正の相関 ( $r = .358, p < .01$ )、学校生活意欲尺度、＜友達関係＞と弱い正の相関 ( $r = .246, p < .01$ )、＜学習意欲＞と中程度の正の相関 ( $r = .406, p < .01$ )、＜学級の雰囲気＞と弱い正の相関 ( $r = .242, p < .01$ ) が認められた。＜社会性スキル成長意欲＞因子、＜学習性スキル成長意欲＞因子ともに、学級満足度尺度、＜被侵害項目＞とは相関関係が認められなかった。以上より、＜社会性スキル成長意欲＞因子、＜学習性スキル成長意欲＞因子について、子どもたちの学校生活における意欲を測る学校生活意欲尺度の3因子と一定水準の正の相関が見られたことは「小学校高学年児童自己成長意欲尺度」の妥当性を示すものと推察される。また、学級満足度尺度、＜被侵害項目＞について「小学校高学年児童自己成長意欲尺度」の2因子と相関が見られなかったことは、弁別的妥当性を示すものであると考えられる。学級満足度尺度、＜承認項目＞は「小学校高学年児童自己成長意欲」の2因子と正の相関が見られた。学級満足度尺度は弁別的妥

当性を検証するために活用したが、同じ下位尺度である＜被侵害項目＞とは異なり、＜承認項目＞については「小学校高学年児童自己成長意欲」と関わっている可能性を示しており、小学校高学年児童自己成長意欲の妥当性を示す一つの視点になる可能性があると考えられる。

## 研究 2

### 【目的】

小学校高学年児童自己成長意欲へのアプローチとなる二つの取り組みを行い、その取り組みにより小学生高学年児童の「自己成長意欲」を高めることができるのかについて検証する。一つ目の取り組みは、「自己成長意欲」の＜社会性スキル成長意欲＞へのアプローチとなるものである。これは学校内において人と関わる新たな機会である教育実習生との出会いをきっかけとして、自分たちの成長を意識するというものである。二つ目の取り組みは、＜学習性スキル成長意欲＞へのアプローチとなるものである。これは毎日の学習に見通しを持つことを繰り返すことで自分の成長を意識するというものである。

## 【方法】

**実践時期** 2013年11月～12月。

**実践対象** 近畿圏の小学校5年生3学級120名。

### 実践内容

#### 1) 実践計画

小学校高学年児童自己成長意欲テスト（プレテスト）、「教育実習生との関わりプロジェクト」の取り組み、小学校高学年児童自己成長意欲テスト（ポストテスト1）、「学習への見通しプロジェクト」の取り組み、小学校高学年児童自己成長意欲テスト（ポストテスト2）からなる。

#### 2) 小学校高学年児童自己成長意欲テスト

研究1で作成した小学校高学年児童自己成長意欲尺度を使用した。教示文は「あなたが、自分自身を成長させることができることには、どのようなことがあり、それについてどのくらいがんばりたいと思いますか。あてはまる数字に○をつけて下さい」であり、5件法（「5：とてもそう思う」「4：そう思う」「3：どちらでもない」「2：あまりそう思わない」「1：そう思わない」）で回答が求められた。各項目をTable 1に示す。

#### 3) 「教育実習生との関わりプロジェクト」の取り組み及び「学習への見通しプロジェクト」の取り組み

研究1で得られた「小学校高学年児童自己成長意欲尺度」は＜社会性スキル成長意欲＞因子と＜学習性スキル成長意欲＞因子からなり、小学生の自己成長意欲を高めるために、それぞれの因子へのアプローチとなる取り組みを行うことにした。

1つ目は、＜社会性スキル成長意欲＞へのアプローチとなる取り組みである。研究1で作成した小学校高学年児童自己成長意欲における＜社会性スキル成長意欲＞は、「どんな人とも仲良くできるようになりたいので、他のことよりも、特にそれを意識してがんばりたい」「人に対するせし方がうまくなりたいので、他のことよりも特にそれを意識してがんばりたい」「はずかしがらずにみんなの輪に入れるようになりたいので、他のことよりも特にそれを意識してがんばりたい」など、主に人と関わる中で自分を成長させようとするものとなっている。小学校高学年児童に対して、＜社会性スキル成長意欲＞を高めるためには、人との関わりを強く意識させることが重要になってくると考えた。

学級という枠組みの中で生活している小学生児童にとって、人との関わりとして意識することができるのは同じ学級の児童または教師であると考えられる。しかし、この取り組みを行う時期が11月であることを考えると、学級における児童や教師は一定の人間関係が出来上がっている可能性が高く、改めて人との関わりを意識する大きなきっかけとはなりにくいであろう。そこで児童にとって人と関わる新たな機会である教育実習の期間を活用することにした。

実践を行った小学校においては、毎年、教育実習生として大学生が全学級に2～3名配置され、教育実習を2～4週間行うことになっている。実践対象とする5年生3学級においても、各学級2～3名ずつ、計7名の教育実習生が配置された。これらの教育実習生との関わりの中で、児童が毎日自分自身を成長させることについて、ワークシートを使って、朝の段階で計画をし、下校時にふりかえりを行うという活動を2週間繰り返すという取り組みである。取り組み時において、「教育実習の先生方が、この学級で2週間を過ごされます。教育実習の先生方はみなさんにとっての新しい先生方であるとともに、学級の新しいメンバーです。この先生方との関わりの中で、自分を成長させてください。今から配るワークシートに、毎日の朝の会の時間に自分の成長についての目標を書きましょう。そして終わりの会のときに、それについてふりかえりを同じくワークシートに書きます。これを教育実習期間の2週間続けます。」という教示を、各学級で行った。この取り組みを「教育実習生との関わりプロジェクト」と名付けて、＜社会性スキル成長意欲＞へのアプローチとした。

2つ目は、＜学習性スキル成長意欲＞へのアプローチとなる取り組みである。小学校高学年児童自己成長意欲における＜学習性スキル成長意欲＞は、「勉強ができるようになりたいので、他のことよりも特にそれを意識してがんばりたい」「学校や塾のテストでいい点数をとりたいので、他のことよりも特にそれを意識してがんばりたい」「色々な問題がとけるようになりたいので、他のことよりも特にそれを意識してがんばりたい」など、主に毎日の学習の中で自分自身を成長させたいという意欲と考えられる。学校生活において大半の時間を占めるのが授業時間であり、小学校高学年児童においても一日一日の授業における学習を意識させるこ

とが<学習性スキル成長意欲>へのアプローチとなると考えた。

そこで、小学校5年生に対して毎日の授業での学習において、自分自身をどのように成長させたいかについて朝の段階で目標を立て、その日の授業について見通しを持って学習にのぞみ、下校前にふりかえりを行う。この活動を、1つ目の取り組みである「教育実習生との関わりプロジェクト」と同じく2週間繰り返した。取り組み時において、「そろそろ2学期が終わります。学期末は、学習のまとめの時期です。この学習のまとめの時期に、学習についてそれぞれ自分がどんなところを成長させたいかについて見通しをもって、学習にのぞんでほしいと思います。今から配るワークシートに、朝の会の時間に自分の成長についての目標を書きましょう。そして終わりの会のときに、それについてワークシートにふりかえりを書きます。これを2学期が終了するまでの2週間続けます。」という教示を各学級で行った。この取り組みを「学習への見通しプ

ロジェクト」と名付けて、<学習性スキル成長意欲>へのアプローチとした。

**【結果と考察】**

**1) 取り組みの様子**

ここでは、「教育実習生との関わりプロジェクト」と「学習への見通しプロジェクト」の取り組みの様子について紹介することにする。

「教育実習生との関わりプロジェクト」においては、Figure 1 に示すワークシートを使い、朝の会で児童がその日一日について、教育実習生との関わりの中でどのように自分を成長させていきたいと考えるのかについて記述していった。そして一日の授業時間が終了し、終わりの会の時間に、自分が立てた目標についてふりかえり、それについて同じくワークシートに記述していった。取り組み期間は2週間であり、そのうち児童の登校日にあたる8日間分の記述欄をワークシートに

年 組 番 (名前 )

●目標

	一日の目標	ふりかえり	先生のサイン
月 日( )			
月 日( )			
月 日( )			
月 日( )			
月 日( )			
月 日( )			
月 日( )			
月 日( )			
月 日( )			
月 日( )			

○全体をふりかえって

Figure 1 研究2で使用したワークシート



設けていたため、一人8個の記述欄における120名分の記述について整理したところ、記述欄の合計960個のうち、832個の記述が見られた。記述内容を整理したところ、「教育実習の先生といっしょに遊んだり、話したりする」「教育実習の先生に自分たちのがんばりを見てもらう」「教育実習の先生にわからない勉強について聞く」「教育実習の先生の良いところを見つける」などにカテゴライズされた。児童が立てた目標に対するふりかえりでは、実行できたものと実行できなかったものが見られ、各カテゴリーにそれらを整理し、それぞれの記述例をTable 3にまとめた。

「学習への見通しプロジェクト」では、Figure 1に示すワークシートを使い、朝の会で児童がその一日の授業や学習において、自分自身を成長させたいと考えることについて記述していった。その後、終わりの会にてそれぞれが立てた目標についてふりかえり、それについてワークシートに記述していった。取り組み期間は2週間であり、そのうち児童の登校日にあたる10日間分の記述欄をワークシートに設けていたため、一人10個の記述欄における120名分の記述について整理したところ、記述欄の合計1200個のうち、1074個の記述が見られた。記述内容を整理したところ、「授業

Table 3 「教育実習生との関わりプロジェクト」ワークシートの記述のまとめ

「一日の目標」及び「ふりかえり」の記述(全記述832/記述欄総数960)				
カテゴリー	記述数	実行できたかどうか	主な記述例(「一日の目標」について)	主な記述例(「ふりかえり」について)
教育実習の先生と遊んだり、話したりする	308	実行できた(286)	運動場で一緒にドッジボールをしたい。	昼休みにドッジボールをすることができた。
		実行できなかった(22)	外で元氣よくいっしょに遊びたい。	クラスの他の子たちと遊んでいて、自分は遊べなかった。
教育実習の先生に自分たちのがんばりを見てもらう	297	実行できた(278)	実習の先生にほめてもらえるようにみんなで協力して活動したい。	みんなで協力している姿を実習の先生にほえてもらった。
		実行できなかった(19)	そうじの時間に班で協力したい。	いつも通りのそうじの準備になった。
教育実習の先生にわからない勉強について聞く	88	実行できた(60)	理科の授業でわからないことがあったので、実習の先生に聞いてみる。	わからなかったところを聞いていたら、やさしく教えてくれた。
		実行できなかった(28)	授業中にわからないことがあったら、その場で実習の先生に聞いてみる。	聞きたいことがあったけど、どのようにしてきけばいいのかわからなかった。
教育実習の先生の良いところを見つける	75	実行できた(42)	実習の先生の良い所をいっぱい見つけたい。	実習の先生がいつも笑顔であいさつをしてくれるところがすてきだなと思った。
		実行できなかった(33)	実習の先生のおもしろい部分を見つけない。	おもしろい部分を見つけることができなかった。
教育実習の先生に自分のことを知ってもらおう	58	実行できた(195)	自分の習い事のこととかを話して、もっと自分のことを知ってもらいたい。	好きな本のこととかを聞いてもらうことができた。
		実行できなかった(113)	自分の趣味などについて話したい。	話しかけるタイミングを見つけることができなかった。
その他	26	実行できた(15)	実習の先生の授業でもしっかりと手をあげて発表する。	今日の実習の先生の授業で手をあげて自分の意見を発表できた。
		実行できなかった(11)	敬語できっちりと話せるようにしたい。	敬語で話そうとすると、うまく話すことができなかった。

中に発表する」「学習内容をしっかりとノートにまとめる」「班で協力して学習を進める」「教育実習の先生の良いところを見つける授業に集中する」などにカテゴリー化された。児童が立てた目標に対するふりかえりでは、実行できたものと実行できなかったものが見られ、各カテゴリーにそれらを整理し、それぞれに対応する記述例を Table 4 にまとめた。

「教育実習生との関わりプロジェクト」の取り組みにおいては、児童にとって自分の教室に教育実習生が来るという新しい環境が作られたことをきっかけとして、その中で様々な視点で自分自身の成長へのアプローチを考えることができたようであった。「学習への見通しプロジェクト」については、「教育実習生との関わりプロジェクト」のような環境の変化は見られなかったものの、「先生が言ったことをノートにまとめる」など、ふだんは特に意識していなかったことについて改めて考える機会となったようであった。一方「手を挙

げて発表する」「協力する」など「教育実習生との関わりプロジェクト」と同様の記述も多く見られ、児童によっては「教育実習生との関わりプロジェクト」と「学習への見通しプロジェクト」の二つの取り組みで同じような目標を持っている児童もいたようである。

## 2) 小学校高学年児童自己成長意欲の変化

自己成長意欲尺度の<社会性スキル成長意欲>因子8項目の合計得点を<生活力成長意欲>得点として、プレテスト、ポストテスト1、ポストテスト2について1要因分散分析を行った結果、主効果が認められた( $F[2,212] = 3.797, p < .05$ )。多重比較(Bonferroni法)の結果、ポストテスト1はプレテストに比べて有意に高くなっていった(プレテスト<ポストテスト1, ポストテスト2)。これより、小学校高学年児童自己成長意欲、<社会性スキル成長意欲>は「教育実習生との関わりプロジェクト」により有意に高まる可能性があることが示唆された。「教育実習生」という新たな人

Table 4 「学習への見通しプロジェクト」ワークシートの記述のまとめ

「一日の目標」及び「ふりかえり」の記述(全記述1074/記述欄総数1200)				
カテゴリー	記述数	実行できたかどうか	主な記述例(「一日の目標」について)	主な記述例(「ふりかえり」について)
授業中に発表する	663	実行できた(451)	国語、算数、理科、社会どの教科でも発表する。	どの教科でも一回は発表できた。
		実行できなかった(212)	授業中に手を挙げるができるようにする。	はずかしくて手を挙げるができなかった。
学習内容をしっかりとノートにまとめる	239	実行できた(235)	黒板に書かれていることだけでなく、先生が言ったことをノートに書く。	先生が言ったことを、しっかりとノートにまとめることができた。
		実行できなかった(4)	ノートの字をいつもよりもきれいに書く。	あわてて書いてしまった。
班で協力して学習を進める	65	実行できた(34)	班での話し合いのときに積極的に自分の意見を言う。	班のメンバーに自分の意見を伝えることができた。
		実行できなかった(31)	班活動のときに協力したい。	結局、いつも通りの感じになり、あまり協力できなかった。
授業に集中する	35	実行できた(25)	先生の話を聞きもらさずにしっかりと聞く。	いつもよりも集中して勉強することができた。
		実行できなかった(10)	友だちが発表しているときもしっかりと聞くようにする。	しっかりと聞くことができなかった。
その他	72	実行できた(64)	たくさんの友だちと話したい。	いつもは話しかけない友だちにも話しかけることができた。
		実行できなかった(8)	クラブで4年の子に優しく教える。	4年生に話しかけることができなかった。

との出会いをきっかけとし、その関わりの中で自分自身の成長について見つめなおすきっかけとなることで<社会性スキル成長意欲>が有意に高まっていったと推察される。

また、小学校高学年自己成長意欲尺度の<学力成長意欲>因子6項目の合計得点を<学習性スキル成長意欲>得点として、プレテスト、ポストテスト1、ポストテスト2について1要因分散分析を行った結果、主効果が認められた ( $F(2,212) = 3.797, p < .05$ )。多重比較 (Bonferroni 法) の結果、ポストテスト2は、プレテストよりも有意に高くなっていった (プレテスト<ポストテスト2)。これより<学習性スキル成長意欲>は「学習への見通しプロジェクト」の単独の取り組みだけでは有意に高まらなかったものの、「教育実習生との関わりプロジェクト」と「学習への見通しプロジェクト」の連続的な取り組みにより<学習性スキル成長意欲>が有意に高まる可能性があることが示唆された。これは、一目的の取り組みである「教育実習生との関わりプロジェクト」の中で、自分自身の成長について意識し始めており、「学習への見通しプロジェクト」により、具体的に自分自身の学習性スキルについての成長を意識することで、<学習性スキル成長意欲>が高まったと推察される。<社会性スキル成長意欲>及び<学習性スキル成長意欲>の変化について Table 5 に示す。

### 【総合考察】

研究1では、小学校高学年児童が自分自身を成長させたいという意欲について明らかにする「小学校高学年児童自己成長意欲尺度」の作成を試みた。その結果、小学校高学年自己成長意欲は<社会性スキル成長意欲>因子と<学習性スキル成長意欲>因子の2因子からなることが明らかになった。これは小学校高学年児童が自分自身の成長について考えるときに、自分自身の社会性スキルについての視点と、自分自身の学習性スキルについての視点の二つの視点で考える可能性があることを示唆している。

小学生にとって学校生活の中でその大半を過ごすのが学級である。学級は小学生が、主に学習をする場であるとともに、学級内における友人や教師など人と関わりながら集団生活をする場である。これらをふまえると、児童が自分自身の成長について考えるとき、学習をする場の中で高めることができる学習性スキルと、集団生活を送るときに高めることができる社会性スキルの二つの視点でとらえていることは妥当なものであると考えられる。速水・西田・坂柳 (1994) は「自己成長力」を「能力自己成長力」「生活自己成長力」「体力自己成長力」の3つの領域について「意欲」「関心」「遂行力」の3階層で捉えていたが、本研究においては、「意欲」に着目した上で、小学校高学年児童は「自己成長意欲」について<社会性スキル成長意欲>と<学習性スキル成長意欲>の2視点で捉えていることが示唆された。これは、「自己成長」についての新たな見解とすることができると推察される。

Table 5 取り組みによる小学校高学年児童自己成長意欲の変化

		プレテスト		ポストテスト1		ポストテスト2		F値(2, 212)	多重比較
小学校高学年児童 自己成長意欲	社会性スキル	平均	30.20	平均	31.95	平均	31.71	7.14**	プレ<ポスト1, ポスト2
	成長意欲	SD	5.85	SD	6.80	SD	6.12		
	学習性スキル	平均	25.52	平均	25.92	平均	26.45	3.80*	プレ<ポスト2
	成長意欲	SD	4.43	SD	4.60	SD	4.60		

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

研究2においては、「教育実習生との関わりプロジェクト」と「学習への見通しプロジェクト」を行うことで、小学生の自己成長意欲を高めることができるかどうかについて検証を行った。その結果、「教育実習生との関わりプロジェクト」の取り組みにより、自己成長意欲、＜社会性スキル成長意欲＞が有意に高まった。また、「教育実習生との関わりプロジェクト」と「学習への見通しプロジェクト」との連続的な取り組みにより、自己成長意欲、＜学習性スキル成長意欲＞が有意に高まった。

＜社会性スキル成長意欲＞については、児童が人とのかかわりや集団の中で、どのように立ちふるまうべきかなど主に社会性スキルの成長に関する意欲であると捉えて、研究2における「教育実習生との関わりプロジェクト」の取り組みを行った。この取り組みが児童にとって教育実習生という「人と関わる新たな場」が設定されたことをきっかけに、自分自身の社会性スキルを伸ばそうとする意欲につながり、＜社会性スキル成長意欲＞の有意な高まりへとつながったと考えられる。

＜学習性スキル成長意欲＞については、児童が学習性スキルを成長させたいという意欲であると捉えて「学習への見通しプロジェクト」の取り組みを行った。この取り組みにおいては、「教育実習生との関わりプロジェクト」のように、児童にとって改めて特別な環境が設定されていないものの、ワークシートを使い毎日の授業について目標を立てることによって＜学習性スキル成長意欲＞に対するアプローチとした。結果的には、「学習への見通しプロジェクト」単独では＜学習性スキル成長意欲＞は有意に高まらず、「実習生との関わりプロジェクト」及び「学習への見通しプロジェクト」の連続的な取り組みの結果、取り組み前に比べて、＜学習性スキル成長意欲＞が有意に高まった。これは、「教育実習生との関わりプロジェクト」の取り組みの時点で、児童がある程度、＜社会性スキル成長意欲＞だけではなく、＜学習性スキル成長意欲＞についても意識しており、その後の「学習への見通しプロジェクト」でさらに意識されたことで＜学習性スキル成長意欲＞が有意な高まりを見せたと推察される。実際に、各取り組みにおける児童のワークシートの記述を見ても、「授業中にしっかりと発表したい」などのように共

通の記述も見られ、「教育実習生との関わりプロジェクト」においても、＜学習性スキル成長意欲＞を意識させるものであったことが伺える。

また、研究2の二つの取り組みについては、一方は教育実習生との関わりという新たな場の設定があった取り組みであり、もう一方は日常生活の中で学習について意識するだけで特に新しい環境は作られてはいない取り組みであるという違いはあっても、児童がワークシートを使って朝の段階で目標をたて、一日の学校生活の終わりの時点でふりかえりをするという点で共通するものであった。これらの取り組みによって、結果として＜社会性スキル成長意欲＞、＜学習性スキル成長意欲＞ともに有意に高められた。これは、児童が学校生活の中で自分の社会性スキルや学習性スキルについてワークシートを使って考えることで自分自身の成長について意識し、意欲の向上にまでつながる可能性があることが示唆されるものであると考える。

本研究の課題として二つの点が考えられる。一つ目は、研究2において小学校5年生120名全員に同じ取り組みを行ったため、統制群を置くことができなかったことである。研究2は2013年11月～12月にかけて行われたものであり、取り組みの結果、児童の自己成長意欲は有意に高まったと考えられるが、統制群を置いて検証しなかったため、その高まりには他の様々な要素が含まれていた可能性も否定することはできないと考えられる。しかし、本研究が学年全体の取り組みであることや、指導の公平性など倫理的な問題をふまえると、小学校という教育現場において授業の一環として取り組みを行う時、統制群を置くことが非常に難しいということも実情であると考えられる。

二つ目は、＜社会性スキル成長意欲＞へのアプローチとしての「教育実習生との関わりプロジェクト」と、＜学習性スキル成長意欲＞へのアプローチとなる「学習への見通しプロジェクト」について、同じ5年生120名に対して連続的な取り組みを行ったことである。連続的な取り組みを行うことで、二つ目の取り組みでは「学習への見通しプロジェクト」が、「教育実習生との関わりプロジェクト」の取り組みの影響を受けた児童に対して行ったことになり、「学習への見通しプロジェクト」の純粋な取り組みの効果について把握することができなかったと考える。しかし、これについては、

特に「教育実習生との関わりプロジェクト」については、教育実習生が来る時期がどの学級も同時期であり、学級ごとに別の取り組みを行うことによる教育現場への影響を考えると、この課題についても簡単にはアプローチできないということが現在の教育現場の実情であるということが推察されるものである。

本研究は、先行研究に見られる「自己成長」について小学校高学年という発達段階に焦点を当て、また「意欲」に着目して研究を行ったものであり、近年の教育課題の一つである児童の学習意欲の低下など意欲についての問題へのアプローチとなる新たな知見になりえると推察される。今後はより精度の高い検証方法を用いて、本研究で得た知見についてさらに深めていきたいと考えている。

#### 【引用文献】

- Bandura, A. 1986 *Social foundations of thought and action: A social cognitive theory*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- 中央教育審議会 2008 幼稚園、小学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について（答申）
- 速水敏彦 2012 「もっと知りたい・学びたい」知的な欲求が高まる 児童心理 2012 年 6 月号臨時増刊 12-17.
- 速水敏彦・西田 保・坂柳恒夫 1994 自己成長力に関する研究 名古屋大学教育学部紀要－教育心理学科－, 41, 9-24.
- 鹿毛雅治 2013 学習意欲の理論 金子書房 7
- 菅野 純 2012 小学五・六年生－その心理的・身体的・社会的発達の姿 児童心理 2012 年 6 月号増刊, 1-11.
- 河村茂雄 2006 たのしい学校生活を送るためのアンケート Q-U 実施・解釈ハンドブック 図書文化社
- Maslow, A. H. 1970 *Motivation and Personality (2ndEd.)*. New York, NY: Harper and Row
- 桜井茂男 1997 学習意欲の心理学 誠信書房 13
- 清水美緒・橘川真彦 2009 小学校高学年における学習意欲に影響を及ぼす要因 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要, 32, 117-124.
- 神藤貴昭 1998 中学生の学業ストレスと対処方略がストレス反応および自己成長感・学習意欲に与える影響 教育心理学研究, 46, 442-451.
- 信野良太 2008 自己成長感尺度作成の試み 北星学園大学 大学院社会福祉学研究科北星学園大学大学院論集, 11, 125-136.
- 柴山 直・小嶋妙子 2006 児童の学習意欲に関する研究 - 自己効力感との関連について - 新潟大学教育人間科学部紀要, 9, 37-52.

(2014 年 11 月 11 日受稿, 2015 年 11 月 16 日受理)

*Development and application of Self-Development Motivation Scale  
for Upper Grade Elementary School Children*

*Shingo Yotsutsuji (Hirano Elementary School Attached to Osaka Kyoiku University)*

*Haruhisa Mizuno (Osaka Kyoiku University)*

The self-development motivation scale for upper grade elementary school children was developed and used to investigate motivation for self-development through a practical study. In study 1, a questionnaire survey was conducted to examine the motivation for self-development in upper grade elementary school children that included fifth and sixth grade students ( $n = 198$ ). Results of factor analysis indicated the scale comprised of the following two factors consisting of 14 items: Motivation to develop social skills and motivation to develop academic skills. These items were used to construct the new scale. In study 2, in order to increase the motivation to develop the capacity for living, a "project for interacting with student teachers," as well as a "leaning perspective project" were implemented. The former aimed to improve students' capacity for living through interacting with student teachers and the latter aimed to develop perspectives on everyday leaning for the end of term examination. The results indicated that the Motivation to develop social skills significantly increased through the project for interacting with student teachers. Moreover, the motivation to develop academic skills significantly increased as a result of continuing the two projects.

**Key words:** the self-development motivation, upper grade elementary school children,  
motivation to develop social skills, motivation to develop academic skills